

山片蟠桃の生涯についてまとめた発表

最初に山片蟠桃についてざっくりした解説

- ・寛延元年(1748年)生まれ 文政4年に死没(74歳)
- ・播磨国印南郡神爪村(はりまのくにいなみぐんかづめむら)に生まれる 現代の兵庫県高砂市米田町神爪村(たかさごしよねだちょう)にあたる。
- ・名前は、升屋の番頭をしていたことからもじったもので幼名は**惣五郎**、晩年には**長谷川芳秀**と名乗っていた。
- ・山片蟠桃は町人でありながらも思想家としての一面も見せており自身の知恵と学問をつき合わせて作成した**夢の代**という主著を残している。

次に山片蟠桃の生涯part1

- ・播磨国印南郡神爪村の農家に生まれる。父は**長谷川十兵衛**といい農業を営むかたわら、糸屋という家合の下に糸(木綿)の取引にも従事していた。
- ・蟠桃は宝暦十年に大阪の升屋の別家として主家を助けていた伯父の長谷川家を相続し、**四代目久兵衛**と名乗った。この時蟠桃は十三歳であった。
- ・蟠桃が仕えた主家升屋の当主の**初代光重**は米の仲買人であった。享保十六年には幕府から大阪を代表する五人の米年寄に任命もされている。しかし、蟠桃が仕えた二代目の**重賢**の頃には升屋の家業は米の仲買よりむしろ※大名貸のほうに向かいつつあったとされている。(※大阪・京都・江戸などの有力商人によって財政窮乏に苦しむ大名に対して行われる金融)
- ・この**重賢**は昭和六年に家督を譲り、同年に死亡する。その年から升屋の取引先である長岡・岡・仙台等の諸藩の経済状況が悪化しました、升屋内部でも相続問題のトラブルも起こっていた。
- ・安永元年、25歳になった蟠桃は六歳の幼主**重芳**を擁して経営の責任を背負うことになった。当時の升屋は全盛期のような豪商ではなくわずか六十貫目の現銀しかなく、身上投出をせねばならない危機に直面していた。

山片蟠桃の生涯part2

- ・蟠桃はこの苦境を乗り越えようと努力し、十年たった頃に再興の兆しが見える。きっかけは天明のはじめに仙台藩との関係が濃くなったことである。天明三年には仙台藩の頼みに応じ**一万五千両**の金を調達し、蟠桃はまた仙台藩の財政の立て直しの相談役になった。
 - ・この時蟠桃が進めた政策が**買米制度**である。この制度は農民の貢租の残米を藩で買い上げそれを江戸に回させる制度である。その買米を行う際には金が必要となるがこの資金は升屋が貸した。また、この回米制度は仙台・銚子・江戸に役所を作る必要があった。
 - ・その費用も升屋が負担したがその費用を賄うために蟠桃は仙台藩に**サシ米**というものを願い出た。このサシ米というものは俵の中にサシを入れて俵の米の検査をするときに、サシに残る米のことをいう。
- 蟠桃は三か所で米の吟味をするため一俵につき一合の減りがあるためその下付を願い出た。海保青陵によるともし一年につき金二百両の下付を願い出れば藩政府の許しはでない。米一俵につき一合であれば許可が出たが、この差し米の合計金額は金にして**年間六千両**になったため費用を差し引いても升屋の収入は莫大なものとなった。

山片蟠桃part3

- ・そのほかにも蟠桃は文化五年から**米礼制度**を考案し、藩の農民には米礼で支払って米を売って得た現金を両替商に貸して利を得る仕組みを作った。こうして仙台藩の財政の立て直しに成功したといわれている。
- ・しかし、その背景にそれ以上に利益を得たのは升屋だといえる。その根拠として寛政四年から文化二年の間に升屋の従業員の数は**約四倍**にもなっている。
- ・その後仙台藩と升屋との関係はさらに密接となり寛政十年からごろから升屋は仙台藩の**蔵元**となった。
- ・そして、蟠桃は仙台藩だけでなく全国の諸藩との経済的関係を持つまでに大商人として成長を遂げた。記録では仙台藩以外に**尾張・水戸・越前・川越・小田原・秋田・弘前etc**などの諸藩と経済的関係をもっていたという。
- ・そんな大商人として成功を収めた蟠桃だったが、文化十年に悪かった目がついに**失明**してしまい、経営の第一線で働けないことを自覚した蟠桃は文化十四年に子供に家督を譲り、文政四年に死去した。